
けど、

水都森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けど、

【Nコード】

N1704F

【作者名】

水都森

【あらすじ】

いつもちよつと寂しい人が、読んで少しでも休憩できるような詩にしたいと思って書きました。《注記：【第1部分～第4部分】人生に関係する詩【第5部分～第6部分】恋についての詩》

落ち込んでみるのもありだと思う

L I F E

見捨てられない昨日

無意識にささくれ広げてる

そんなに振り返っても

見えなかったものは見えない

もういいじゃん？

どんなにもがいたって無理なものは無理

そうやってつけたメリハリが

いつか輝きにつながる

机に向かうだけじゃなくて

道に出るのも必要だよ

ねえねえ

さみしいのなくすのって、

どうやるのか教えてよ

叱るなら

まず 心の穴埋めてからにして

f u t u r e

無機質な街を歩いていく

人々の

その目はカラッポで

道端に咲く花の無邪気さがつくる

柔らかなえくぼは

誰にでもあるはずなのに

僕らは荒波に逆らうために

心に咲く優しい花の

芽を自ら摘んでしまったんだ

くすんだ空へと伸びていく

助けてと

決して聞こえない叫び声が

雨上がりに架かる虹を見る時の

綺麗な目の輝きは

僕にもあつたはずなのに

僕らは潮風を避けるために

目に宿る希望の力を

固く閉ざしてしまっただ

僕らは嵐に耐えるために

未来を指す羅針盤を

海へ自ら捨ててしまっただ

僕らは荒波に逆らうために

心に咲く優しい花を

芽を自ら摘んでしまっただ

海底

味わおうとも思えない時間をやり過ごす

薄っぺらな笑顔に囲まれる日々

もがこうともせず

僕の心は

いつも曇ってるこの町に沈んでた

底の見えない暗闇に怯え^{おび}

上辺^{うわべ}に必死にしがみ付いた

いつの間にか

手は棘^{とげ}だらけになってた

なんで僕らはそんなにも

ヒトリボツチが怖いんだろう

誰の手も繋^{つな}がずに

人は生まれてくると言うのに

きらめく笑顔は

一体どこへ消えてしまったの？

透き通ってたあの心は

いつの間にか灰色になってた

なんで僕らはこんなにも

綺麗^{きれい}なことを嫌がるんだろう

愛を受けいれる気持ち

人には与えられているのに

正直になれない息苦しさを飲み込んだ

ここは本音の幸せ隠す海底

一筋の光が

僕の見つめる仄暗い夜空を掠めた

輪

目立っちゃいけないんでしょ？

瞳が言ってるもんね

「周り」が答え

真実が正答ただしいかなんて問題じゃない

みんなは”ひとり”を許さないから

”僕”を消したら ぽっかりと開いた穴

必死に無視してても

そこを吹き抜ける風は息を詰まらせる

あれ？でも笑えるよ？

何でか色のない涙も流れるけど

定規じょうぎなんていらなんじゃなかった？

僕らしくいればいいんじゃないの？

前言撤回？そんなの聞いてないよ

無言の線 引っ張って

こどもだって冷たい目してる

嘘だっ てほんとになる

そんな世界許していいの？

いいんだよね 言ってるもんね

息苦しくてしゃがんでも

知らん振りして通り過ぎる

そしたら僕はいないんだ

それがセイカイ そうだよね？

そして 僕も「みんな」の一人

忘れちゃいないよ

さつき

うずくまり人ごみに消えてった

小さな”僕”がいたから……

空を見上げてみるだけ、それだけ

W i n g

堪えてた

ひとりぼっちの寂しさ

最後の灯りが

風に消えた

僕の手は小さいけれど

よごれた土だって

握り締められる

我慢した

本音本当の気持ち

一つの光りが

海にとけた

僕の声は消えそうだけど

くすんだ雨には

届くはずだから

僕の翼は脆いけど

よどんだ空だって

見上げられる

きっとそうだから

P
o
w
e
r

t
o

b
e
l
i
e
v
e

ほんとを言うのに勇気がいるのに

ウソの方が綺麗に見える

前へ踏み出す足を止めないで

道は未来へ続くから

例え小さな一歩でも

勇気は闇を溶かすから

ささやかな喜びだけを当てにして

正義の味方を信じてみるのも

たまには悪くないんじゃない？

真っ直ぐな目でい続けることは

ニゲルことより難しい

光輝く笑顔を消さないで

笑顔は希望へ変わるから

例え かすかな笑顔でも

希望は影を照らすから

ひとりじゃないよ

目が覚めて窓を開けた

体温で緩んだ部屋の中に

生まれたての風が流れ込んでくる

好奇心いっぱい空気は心にも入り込む

その元気が冷たかった

ねえ

ひとりじゃないよ

だから手放さないで

もらったあの糸

無理やり握らされたものだったかもしれないけど

離さないで

空にはもう光が出てて

楽しそうに飛びまわる鳴き声をバツクに

ちよつと前まで暗かった雲も洗濯中

でも 混ざれないような気がする

行っちゃいけないような気がする

ねえ

ひとりじゃないよ

だからやめないで

気がつかないことなんかじゃないから

見てる人はいる

感じてる人はいるから

この雰囲気は爽やかに染まりたい

好きだよって叫んで

晴れた空 堂々と抱きしめたい

そんな大きい気持ち

僕じゃ抱えきれないって諦めないで

あのね

みんなが怖いんだよ

さみしいって思い込んでる

だから大丈夫

君だけじゃないから

ひとりじゃないよ

温ぬるい空気を守りたくて

すぐ閉めたくなっただけ

いつの間にか冷えてた棧に身震いした

ちよつとだけ換気

出かけるときにはまた閉めるんだから

だから

大丈夫

何も考えないで、立ってみて、うーんと伸びしてー…っ

たまご

夕闇に染まった小船に

乗り込んだら足がついた

ゆらゆら

夜の川に行く

今は追い風はないから

三番目の星を目指す

この世界に連れ出してなんて

誰も頼んでないのに

傷がいつぱいの顔で笑えなんて

無理な話だよ

でも 暗くなきゃ

星は見えないことに

気づいた

生んでくれてありがとうって

今は素直に言えないけど

とりあえず この殻は破ってみる

そら

地面見つめるだけじゃなくて

空見あげたっていいんだよって

当たり前なのに

肩が軽くなった

ほら、空は何色だった？

R u n n e r

心 鋼に染めないと

生きてユケナイけど

そんなに重くちゃ

碧い空は飛べない

I t ' s s t a r t s p o t h e r e !

思い切って飛び立とう

君にはあるんだから 綺麗な翼が

一生懸命になると

みんなに笑われるけど

見ているだけじゃ

汗の輝きは分らない

I t ' s s t a r t s p o t h e r e !

思いつ切り走ろうよ

君にはあるんだから 立派な足が

人生と言う名のレースを

涼しげな顔をして

悠々と優雅に

コーナーを抜けるのか

勢いよく風を切り

生き生きと

ゴールテープを切るのか

どちらをとるかは

R u n n e r 君次第

A r a y o f h o p e

この汚れきつた世界の中で

ただ一人白くいて

折れそうになりながらも

綺麗な目を持ち続け

君とは不釣り合いな世の中に

失望し絶望しても

希望は絶対に捨てない君は

闇に包まれたこの世界でも

優しい色に包まれて

一見脆そうに見えても

芯は人一倍強く

どんなに生き辛い世でも

冷た過ぎる雨に打たれていても

懸命に前を向こうとする君は

To you who shines

その光消さないで

By that light

涙溢れる世界かもしれないけど

Please wash the world

綺麗な涙で

僕の暗すぎる影さえも

君の光は

とかしてしまっただから

手

あなたの横にだっているよ

隣に人がいなきや

人間の手はこんなに温かくなれない

だから今度は君が

その子の手をつかんであげる番

ほらもう冷たくなってる

他の人にあげてこそ

あつたかくなるぬくもり

ちょっと元気に生きてみよう。

e y e

大切なもので自分を塗り潰す

「それでもいいの？」

かすかに聞こえる声も

見えないフリをした

”常識”とか”教養”とか

習う前のほうが

たくさん笑ってた気がする

未知を怖がることだけは

変わっていないけど

仕方ないことなんだと

思い込んでみても

あれから何だか

ちいさな瞳

真っ直ぐ見つめられないよ

守るのに必死で

探すのを怠けてた

「そんなの駄目」なんて

考えもしなかった

あれこれ考えすぎて

行き止まりに追い詰めて

希望を求めるのに

喪失感に耐えられなかった
脆い僕

現実にあわせたんだと

開き直ってみても

あれから何だか

想いもひねくれて

流れ出す涙 それさえも嘘くさい

世界なんてもの

顔はいくつでもあるのに

言い訳に 可笑しいほどこだわって

あれからだよ……

心の中の僕が

眩し過ぎて目を伏せる

弱虫になったのは

必死な声を感じた

やっと頭を振り被る^{かぶ}

胸のふるえは殻を破った

これからはきつと

君の瞳も受け止められるかな？

マジシャン

ここは赤茶けた看板が立った劇場

星の見えることが入場料

”イマ”とクラクションの二重奏の中で

今日も列は並んでる

眩しくもないライトに包まれ

決まり文句を口にするは

見慣れない色に咳き込んだ

純粹で真っ直ぐな手品師

妥協とイチバンに塗れた世界で^{まみ}

人恋しいと嘆いてる

カタチだけの雫達を眺め

自分を縛る迷い人

そんな青白い顔しないで

今はまだ夏でしょう？

太陽を鬱陶しそうに見上げる

背伸びしたイタズラっ子

唯一綺麗だったはずの欠片は

いつの間にか染まっていた

大事な（そんな）ことも気にせず

彼は今日も台の上へ立った

素直と無邪気を守るため

彼は今日も道具を取り出した

leaf

そう 僕らはきつと弱虫

どっかで逃げてる

零れそうな葉っぱ達を

どうしたらいいのかわからなくて

増えすぎちゃったものは

捨てなきゃダメでしょ

「あれもこれも」なんて

そんな欲張りな真似 神様は許しちゃくれない

潔くさよならしよう

そう 僕らに必要なのは

いつか出来る大切なもの

抱きしめるだけの言葉だけ

ただそれだけあればいい

両手を空にしたら

あの虹だつて掴める

そんな気がしてきたでしょ？

ついでに弱虫からも 脱却できたみたい

あとはステキに生きるだけさ

いつか出会える

”だいじなもの”を夢見て……

a s i t a

火傷しそつなくらいおつきな夢

追いかけてるchallenger

ささくれ立った手で

もがく小鳥 無理やり閉じ込めたって

すぐすり抜けちゃうのに

顔もわからない「みんな」に

振り回されてボロボロで

” 頑張らなきゃいけない ” なんて

誰が決めたの？

どんなに素っ気無く背伸びしたって

伏せる視線は隠せてないよ

喉に突っかかっている 置き忘れてきたもの

それが何か思い出せなくて

時間を気にして焦ってる

終わりがいつかも知らないのに

「好き嫌いはいけない」と

小言と一緒に自分も噛み砕く

矛盾し過ぎてることを

自信満々に見せかけて話すオトナ達

「早くおいで」と明日は急かし

思い通りにはいかせてくれないけど

顔も見せない奴に

負けたくないから

ねえ そうじゃない？

知らない未来より この夕日を見ていようよ

何度も転びながら追いかけてくる

幼い僕を待つてよう

見えないことなんて 教えなくてもいい

逆に教えてもらおう

忘れてしまった この空との遊び方を

キャンバス

安心という名の鎖を解き放ち

風が差し込む光窓

ぶつきらぼうな 太陽も

七色に染まってる

晴れ空ハレゾラかもしれないから

普通のヴェールを切り開き

横道に踏み入れる

もしかしたら それは

瑞々（ミズミズ）しい虹に続いてる

小路コミチかもしれないから

君の canvas

世界で唯一つきの

大切な一枚

何色に塗ったっていい

何にも書かなくなたって

ほら もう

廃棄ガスの音は

聞こえない

君だけの c a m v a s

だから

光に照らされ雑草^{クサ}達踏みしめ

胸張って歩こう

T
h
e

w
a
y

f
o
r

m
y

l
i
v
e

泥まみれになりながら

生きる意味探さなくていいよ

僕らは生きてる

それだけでいいだろ

闇雲に走ってるだけじゃ

景色なんて味わえない

ゴールに辿り着く事だけが

人生の意味じゃないんだから

L e t ' s e n j o y i t l i f e

諦めない事も大切だけど

やっぱり人生は楽しまなきゃ駄目

強がってばかりじゃ

頑張ってばかりじゃ

心から笑えないでしょ？

o n l y o n e l i f e

一度しかないんだから

好きなことしたっていいじゃん

作ってばかりじゃ

溜めてばかりじゃ

自分なくしちゃうよ？

行き止まりになってから

自分の夢考えるのも遅くはないよ

価値のない人間なんて

意味のない人生なんて

絶対に存在しないんだから

歩いてるだけで

そこには跡が残ってるんだから

あーあ、この涙は冷たいなあ……

j o u r n e y

L o n g j o u r n e y

雪のように儚い呪文

掴んだときには消えていて

残っているのは 冷たさだけ

頬を伝う切なさの証は

木漏れ日の川に流された

どこへ行っても逃げ場の無い

追跡者は悩める心

L o n g j o u r n e y

水よりも燦^{キラ}やかな魔法

どうしても捕まえられない

手に取れるのは 空しさだけ

危なっかしい足取りが

見てられなかった幼い心

夜空の涙は

待つてはくれなかったけど

D r e a m j o u r n e y

記憶の中に埋もれる約束

どんなに遠くなっただって

薄れては くれなくて

L o n g j o u r n e y

夢のように儚い呪文

掴んだときには消えていて

残っているのは 寂しさだけ

w i n t e r ' s s o n g

電工色に彩られた 並木道

白く染められた息は

無表情な風に飛ばされた

「明けない夜はない」なんて

ありきたりな言葉だつて

心 暖めてくれたのに

隣の席は空っぽで

霜に陰つた桜の蕾は 一人震え

脆い糸は巡りあえずに

寂しく道に迷つて消えた

「赤い糸で結ばれた」なんて

ありふれた言葉だつて

瞳 照らしてくれたのに

横には風が吹き抜けた

天まで届くツリーは 光を纏い

俯く顔をあかるく照らす

柔らかな輝きは乾いた空気に響き

涙色にそまつた殻を

眠る空の下 そつと脱ぎ捨てた

m i n d h e a r t

雪の輝きを 私に下さい

小さな星は 消えたけど

幼い恋火^{コイヒ}は 澄んでいて

私の手では 消せなくて

心の声を 隠せずにいた

素直なその手に 包まれない

吹雪もとかせぬ 優しい鍵は

一体誰なら 許してくれるの？

幼い笑顔は 涙を連れて

私の目では 見えなくて

真新しい白は 水に塗れた

それでも 輝き失わず

想い言葉にしても

貴方の心には伝わらない

To understand it

Without can get it over

振り返らない　そう決めたのに

欠片の誓いは　ずっと消えた

切ない言葉は　心に響き

瞳の灯りを　止めたけど

今日も空は　笑顔に満ちて

変わらず　季節は巡ってく

H a n d
i n
h a n d

鮮やかな花火が

絹に響いた

歪んだ水面は
ミナモ

二つの影を消した

貴方と繋いだ手は

風の中でも温かくて

何故だか頬に

一筋の光が伝った

眩しい光で

素直になれない

眩く宝は

床へと落ちた

貴方と繋いだ手は

雪の中でも暖かくて

何故だか心が

切なく縮んだ

透き入る心は

冷たく氷

優しい灯りも

点せなくて

貴方と繋いだ手は

さようならを選んで

最後の瞳は

隠せなかった

見えない s t a r s

不器用な太陽の瞳メから

灰色模様の涙

何処にも迎えられず

誰にも抱きしめられず

空しく地に落ちた

望みすぎた希望は

切なさに変わった

凍えた夜月ヨシキに浮かぶ

硝子色の微笑み

誰にも慰められず

何処にも行き着けずに

虚しく空を舞った

淡く苦く焦れる心は

悲しみに流された

巡り逢わぬ運命の

サダメ

世界の幼い支配者達

遥かな空の中

果て無い海の上

俯き歩いていく

恋って暖かくなる瞬間。

t h e c e n t e r

どんなに迷っても

君の声が道しるべ

軽い翼で

飛んでゆくよ

澄んだ空を忘れられず

自由に飛べた日を

憧れ込めて眺めた

どんなに困っても

君の顔が元気薬

すぐに微笑み

取り戻すよ

一番大切なもの見つけられた

光り輝く奇跡

そっと優しく抱きしめた

どんなに悩んでも

何時でも君の心が答えだから

目を開け真っ直ぐ

見つめるよ

H a p p i n e s s - c o l o r e d d r o p

瞬きの中に閉じ込める

夢への置き土産に

私の枕はもう

すっかり涙に染まった

私まだ 君のこと

見ているだけしか出来ないけど

想いはきつと

天まで届けてみせるから

振り構ってられない

気持ちはどんどん加速して

今にもはち切れそうな心を

無理やり閉じ込める

君には 私なんて

釣り合わないかもしれないけど

想いはずっと

海の底まで募っていくから

楽しむのには主役がない

幸せ色のドロップ

今は悲しい味しかないけど

スパイスが混じれば世界一のレア物

そうなること祈りながら

今日も瞳を閉じています

s k y l i g h t

広い砂漠で蹲るうつすくま

戸惑いの中で 言葉は揺らめき

涙の海にとけていった

翼を捨てた僕の背中へ

何だかとても 寂しくて

忘れたはずの想いは

新芽の香りに誘われて

舞い戻ってきた

上を見上げて目を瞑る

桜の想い 儚くて

苦くて切ない羽を身にまとった

君の笑顔が鍵になり

希望の窓が 開いてく

カラッポな心満たされて

勇気の囁き

鞆につめた

空色の道は遠くまで

続く端は見えないけれど

二人分の席は用意してあつて

手の中の 花びらを

僕はそつと握り締めた

愛

一言では表したくない

この気持ちは

簡単に済ませたくないんだ

だけど 僕のこの気持ちは

好きの気持ちの最上級

紛れもなく愛なんだ

これ以上シンプルな言葉はないけれど

これ以上温かい響きを持った言葉もない

これ以上ありきたりな言葉はないけれど

これ以上心に染み入る言葉もない

この言葉でしか伝えられないのも悔しいけど

もどかしい気持ちを

どうぞ

愛してます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1704f/>

けど、

2010年12月17日02時24分発行